

問題用紙

別紙の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

- ① 傍線部「さて、自分ごととして考えること、他者への共感は大事なことであるが、実は大変難しい側面をふくんでいる」とありますが、どのような点が「難しい」と筆者は考えていますか。またそうした「難しさ」を乗り越えるためにはどのようなことが必要だと主張していますか。
- ② あなたが学校の先生になった時、児童生徒とのかかわりのなかで①の考えをどのように活かすことができますか。具体的に記しなさい。

全体で、600字以上800字以内で書きなさい。下書き用紙、答案用紙ともに回収します。（下書き用紙、答案用紙の区別は、左下に記されています。）下書き用紙は採点の対象にはしません。

人の立場に立つてものを考えること、すなわち共感することが、こんにちの社会ではしばしば求められる。なぜなら、立場の異なる人、意見が対立する人の視点に立つてものごとを考えることにより、立場の違いによる意見の違いや対立点がどのような背景や枠組みによって生じているのかをより深く理解でき、解決点が見つかりやすくなるからである。

しかし、共感のかたちは人によってさまざまである。たとえば、コラムニストのブレイデイミかこさんは、この共感、つまり「その人の立場だったら自分はどう感じ、どう考えるのかを想像して、理解すること」を「他者の靴を履く」と表現する。ところが、私の知人の精神科医は、共感のことを「他者と自分が電線でつながっている感じ」と表現した。前者は空間イメージ、後者は線のイメージである。私個人の共感のかたちは、「相手と自分の境界が重なること」であって、場合によっては境界が壊れることであり、空間イメージである。読者の皆さんはどのように共感を表現するだろうか。

共感のかたちを議論するときには注意しなければならないのは、自分と他者との境界のかたちである。境界には少なくとも二種類あって、ひとつは異なる領域の境目を示す線的な境界 (Borderline) であり、もうひとつは内側を囲む境界 (Boundary) である。国境などは前者である。そして、共感が線イメージである場合の境界は前者、空間イメージである場合は後者であろう。

さて、自分ごととして考えること、他者への共感は大変なことであるが、実は大変難しい側面をふくんでいる。難しいというのは、もちろん共感すること自体が難しいということでもある。しかし、ここで指摘したいのは、別の難しさである。とくに空間イメージの共感の場合、境界が重なること (境界壊し) は、自分の内面にかかわるので自己喪失の危機を伴う。自分の境界がなくなるまで他者に同化する危険があるためである。ブレイデイさんも、「自分の靴」を手放さずに「他者の靴を履く」という適度な*エンパシー」について言及し、「他者の靴を履きすぎて、自分を見失うようでは本末転倒」と述べている。たとえば、ある人の現状に共感しすぎて、自分の現在の生活がおろそかになるといったことが例として挙げられる。過適応もこれにあたる。

過適応とは、過剰適応とも言い、ある環境に合うように、自身の行動を変える程度が度をを超えている状態を指す。またそれを習慣的かつ反射的に行ってしまうという特徴がある。過適応においては自分と他者との間の境界が失われ、境界が壊れてしまうこともある。過適応のひとつは、相手に過適応するので、相手によって違う顔を見せる。相手が一人ではなく集団であるとき、集団への過適応は、集団との「境界壊し」による共感能力の発揮となり、集団無意識を読む力ともなる。シャーマンや巫女などが発揮する力はこれにあ

たる。※憑依ひょういと呼ばれる現象は、集団無意識、あるいは集団が重要と考える人物との境界壊しである。

しかし、このような危険性をもつ境界壊しは、精神的なくせを直すために役立つこともある。精神分析のプロセスで、目の前の※セラピストを※クライアアントが自分自身の精神的葛藤のうえで重要な人と重ね合わせ、自分をふくめて三者の境界を重ねてしまうことを「転移」という。また、転移で生じた境界溶解をテコに、自分の境界を再構築するための心理操作を「徹底操作」といい、治癒に不可欠の操作となる。

ところで、他者に対して有効な助言を行うためにも、相手に対する共感が重要になる。相手に届く言葉をかけるためには、それなりに相手にそつたものの言い方が必要となる。そして、自分と相手との距離を常に確認しなくてはならない。そこでコミットされる側とコミットする側の相互作用は避けて通れない。コミットする対象に無限にのみこまれてしまうこと（対象イコール自分）と、まったくコミットしない静観（対象と自分は無関係）との間に、さまざまな距離感を設定できる。そしてこの距離感をたもつため、つまり「決して同化しない」ということを実行するために不断の努力が必要となる。対象イコール自分となつて境界が失われ、壊れてしまったら、適切な助言はできないのだ。近しい友人から相談をもちかけられ、それが不幸な内容をふくんでいる場合、相手への助言はこういった困難を伴う。

各種の科学においては、常に主客の分離が必要とされる。主客の分離は、右に述べたような距離をとるための不断の緊張感を取り除いてくれる、という意味で、ある種の効率追求なのかもしれない。しかし、研究領域によつては、対象への関与が必要となるものもある。その場合、対象への関与と距離をとるための不断の緊張感が同時に要求される。

藤垣裕子「科学と社会を考える 共感のかたち」

※エンパシー…感情移入。人の気持ちを思いやること。

※憑依…霊などがのりうつること。

※セラピスト…治療士、療法士。

※クライアアント…依頼人、顧客。カウンセリングで、適応上の問題を

かかえていて、カウンセラーの助言を受けに来る人。

受験番号

